

平成28年度 文化庁日本語教育大会

第3分科会

「地域における日本語教育人材の 養成・研修プログラムを考える」

「外国人住民・日本人住民 共育ち日本語教室展開事業」実践から



さぼうと21

社会福祉法人さぼうとにじゅういち

学習支援室 矢崎 理恵

さぽうと 2 1・団体概要

■ 日本に定住する難民、中国帰国者、日系定住者等定住外国人およびその子弟などの自立を支援する「社会福祉法人」

■ 活動の始まりは1979年「インドシナ難民を助ける会」

現在は、認定NPO法人 難民を助ける会[AAR JAPAN]・社会福祉法人さぽうとにじゅういち に分かれて活動している

■ 基本的な活動の資金は全て個人もしくは団体からの寄附

支援の対象

「インドシナ難民」「条約難民」「第三国定住難民」

「日系定住者」「中国帰国者」など

日本に「定住」する外国出身者

- ★「難民」は当面、自国に帰ることはできません。
- ★「難民」は計画的に移住し、生活基盤を整えること
はできません。
- ★「難民」にとっては、同国・同地域出身者が必ずしも共
に生活を助けあい、支え合う存在ではありません。
⇒地域に根差した日本語学習教室に行きにくい事情

学習支援室の体制

学習者
約100人

(難民等)
(小学生～60代)

ボランティア
約100人

(大学生・社会人・
定年退職者等)
(多国籍化)

コーディネータ・アシスタ
ント(共に日本語教師)

スタッフ(支援室担当)

*有償

学習支援室の基本方針

- ボランティアによる日本語学習、学校教科学習の支援
⇒その「学び」が皆さんの自立や自己実現につながるなら
できる限り学習者の希望を受け入れ、
一緒に学んでみましょう！

⇒より広い意味での「学び」の支援へ

- ・毎週土曜日 午前10時から午後6時の間 入れ替わり立ち代り
- ・固定ペア・学習者 1 人ボランティア 1 人の個別学習
+ 日本語教師ボランティア主導のグループ授業
- ・「卒業」なし
- ・「地域に根差した教室」ではない



ボランティア

■ 「学びのメニュー」が多様化し、活動するボランティアも多様化。
ボランティアが多様化し、「学びのメニュー」も多様化

- ① 日本語教育の専門家・現職日本語教師 約10名
- ② 日本語教師養成講座（420時間）修了者 約20名
大学で日本語教育副専攻
- ③ どちらかで日本語教師養成講座修了 約5名
- ④ 「日本語教育」について学んだことはない 約65名

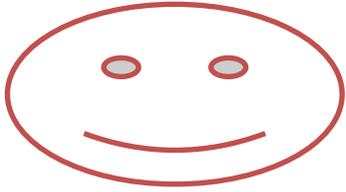
ボランティア

能力試験対策やグループ授業
は原則として日本語教育を
本業とする方が担当

- 「学びのメニュー」が多様化し、活動するボランティアも多様化。
ボランティアが多様化し、「学びのメニュー」も多様化

- ① 日本語教育の専門家・現職日本語教師 約10名
- ② 日本語教師養成講座（420時間）修了者 約20名
大学で日本語教育副専攻
- ③ どちらかで日本語教師養成講座修了 約5名
- ④ 「日本語教育」について学んだことはない 約65名

グループ授業のアシスタントとして入ったり、専
門性や特技を生かせる学びの支援で本領発揮



ボランティアUさん

難民と聞いてもピンと来なくて やってきました・・・
私でも何かできることがありますか？

- ・本業がフードコーディネーターとうかがい、「カフェプロジェクト（支援室開催日に不定期で臨時のカフェコーナー設置）」を実施していたボランティアに紹介
⇒主な担当者が2人になったことで「カフェプロジェクト」がバージョンアップ
⇒外部のお祭り等にも学習者、ボランティアで参加！！
- ・文化庁事業の「日本語教室」にアシスタント（指導補助者）として参加
・体験重視の同教室で「トライ！日本の味」と題した授業を行うことに・・・
⇒どちらかと言えば、「日本語指導者」が「指導補助者」!?
- ・「どう話したら、どんな資料を用意したら、伝えたいことが分かりやすく伝わるのだろう」と思案し始める
⇒教材（資料）作成に着手
⇒他のボランティアがPCでデータ作り、やさしい日本語での表現など、できることで協力
- ・学習支援室の子どもたちの昼ごはんが「コンビニ弁当」や「お菓子」だったりすることを憂い、「セルフおむすびDAY」を提案、来月から実施の予定

✚ さぽうと2 1の現場で求められるボランティア

- 他者（学習者や他のボランティアなど）の声に耳を傾け、その想いを受け止めることができる
- 他者（学習者や他のボランティアなど）に自分の想いを理解してもらおうと努力できる
- 日本語（でも他の何かでも）を一方向的に教え込むのではなく、共に学ぼうという姿勢をもっている
- 日々の活動を振り返りながら、より良い活動を目指して主体的・自発的に動くことができる
- 自身の「できる(得意なこと)」「できない(苦手なこと)」が認識できている

✦ さぽうと2 1の現場から考える 『研修』

- 「東京」という地域から、様々な研修に出向こうとすれば、出向けないことはない
- 日々の活動そのものが学習者だけでなく、ボランティアにとっても「学び」の場であり、必要なことは個々の学びを共有し合える場づくり、関係づくりではないか

✚ さぽうと 2 1 の現場から考える 『研修』

- 日々の活動そのものがボランティアにとっても「学び」の場であり、必要なことは個々の学びを共有し合える場づくり、関係づくりではないか
- 年2回の顔合わせ会（昼の会1回・夜の会1回）
- 個々のボランティアの温度差に配慮して、適度な（個人）情報の共有、適度な声かけ、近すぎず遠すぎずの関係づくり
- カフェの設置（おしゃべりの場）・クラブ活動

✚ さほうと2 1の現場から考える「研修」

- 日々の活動そのものがボランティアにとっても「学び」の場であり、必要なことは個々の学びの場づくり、関係づくりではないか

- フラットでオープンな関係づくり
- 三角形の体制づくり
- カフェの設置（おしゃべり活動）

✚ さぽうと2 1の現場から考える 『研修』

- 「東京」という地域から、様々な研修に出向こうとすれば、出向けないことはない
- 日々の活動そのものが学習者だけでなく、ボランティアにとっても「学び」の場であり、必要なことは個々の学びを共有し合える場づくり、関係づくりではないか
- 皆が直接「日本語」の学習支援にあたっているわけではないことから、共に学びたい事からは「日本語」以上に「在留資格について」だったり「対人関係の築き方」であったり、その時々々の学習者の顔ぶれ、ボランティアの顔ぶれ、社会情勢等によっても変わってくる。主催者側主導の「研修」というよりは現場の声を拾いながらの「勉強会」が必要

✚ さほうと2 1の現場から考える 『研修』

■ 主催者側主導の「研修」というよりは現場の声を拾いながらの「勉強会」が必要

□ 予算はほとんどない

● 学習者からの発信の場づくり

● 役員やボランティア、知人等の協力を仰いで勉強会の企画・実施

● DVD鑑賞会の実施 等

□ ある程度の予算が必要

● 文化庁事業として実施

✚ さほうと2 1の現場から考える「研修」

- 主催者側主導の「研修」というよりは現場の声を拾いながらの「勉強会」が必要



現場の声に常に耳を傾け、
タイミングよく「必要な学び
の場」を提供していく！

会の

✚ さほうと2 1の現場から考える 『研修』

■ 勉強会内容（このほかにクラブ活動等随時）

H27年度

■ **ミニ講演会**（講師：景山宙さん（幼少時に中国から来日）「私の25年、悩み・葛藤・期待-アイデンティティの変遷とともに-」）

■ **DVD「グッド・ライ～いちばん優しい嘘」鑑賞会**

■ **ボランティア勉強会（全2回）**（講師：岩田一成氏「日本語教室での「対話」を考える～『にほんごこれだけ！』を使って～」）

H28年度（継続中）

■ **ミニ講演会**（講師：J.A.さん「アフガニスタンーパキスタンーそして日本で」）

■ **ボランティア勉強会**（講師：小川郁子氏「外国につながる中学生の学習支援」）

＊ 中高生向けに実施した「先輩の話を聞く会」にボランティアも同席

文化庁事業の“研修”

「現場の声を聞きながら実施する勉強会」の延長線上に・・・

「外国人住民・日本人住民 共育ち日本語 教室展開事業」

- 1 理解を深める講座
- 2 スキルアップ講座

文化庁事業の“研修” H27年度「理解を深める講座」

■ 目的

共に学ぶ「生活者としての外国人」について理解を深めること。

自らの教室活動を、多文化共生・ダイバーシティの別の視点からとらえ直し、日々の活動の振り返りや改善を意識できるようになること

■ 対象

地域日本語教室でボランティアとして活動している人、または活動に関心がある人
(どなたでも歓迎)

■ テーマ

「一(いち)市民として学び、考える『難民』のこと～当事者の言葉を紡ぎながら～」

■ 講師等

講師：大原 晋氏（公財 アジア福祉教育財団難民事業本部）

明石 純一氏（筑波大学 人文社会系 准教授）

大森 邦子氏（社会福祉法人 日本国際社会事業団 常務理事）

語り手：中東、アフリカ出身の難民 2 名,インドシナ難民 2 名

平成25年度 理解を深める講座 第2回
「多文化共生社会日本の今、そしてこれから」



ないもの又はそのような恐怖
その国籍国の保護を受ける
もの...」(難民条約より)



平成27年度 理解を深める講座
「一市民として学び、考える『難民』のこと」

文化庁事業の“研修” H27年度「理解を深める講座」

これから・・・

「難民等定住外国人の自立支援を行う団体」として、そのネットワークを生かし、これからも**外国人住民の想い、困難、喜び、考えを直接じっくり聞く機会を提供していきたい。**

「発信者＝外国人住民 受信者＝日本人住民」という構図ではなく、**受信者側にも外国人住民が数多く参加してもらえるよう工夫し、日本人住民と外国人住民が共に学ぶ機会としていきたい**

文化庁事業の“研修” H27年度「スキルアップ講座」

■ 目的

地域日本語教室で活動を続けるボランティアが、各人の活動の場で、より有効な活動ができるような「スキル」、「意識」をもてるようになること

自らの教室活動を、多文化共生・ダイバーシティの別の視点からとらえ直し、日々の活動の振り返りや改善を意識できるようになること

■ 対象

地域日本語教室でボランティアとして活動している人、または活動に関心がある人

■ テーマ

「読み教材」を知る、使う、創る

■ 内容

「読むこと」について、基礎的なことから共に学び、共に考えていく

教材を知る①②（・様々な日本語「読み教材」について知る ・「やさしい日本語」について学ぶ）

教材を使う①②（・「読む」活動を考える・「読む」活動の進め方を考える）

教材を創る①②（・学習者に合わせた読み教材作りについて学ぶ ・「リライト」について学ぶ）

「読む」活動を創る①②（・講座での学びを活かして実際の「読む」活動に挑戦）

文化庁事業の“研修” H27年度「スキルアップ講座」

これから・・・

現場で活動するボランティアが「学びたい」と思っていることを「学べる場」「悩んでいる」ことを「考え会える場」でありたい。日々の活動のモチベーション維持・向上に資する研修としたい

主催者側の「かくあるべき」を一方向的に押し付けることなく、講座の進行の中で「参加型」、「語り合い」や「共有」、「振り返り」「改善」、「主体的・自発的参加」を経験し、日々の活動に役立ててほしい

地域日本語教室それぞれに異なる事情や課題を抱え、必要とされる研修も異なるであろうことから、平成28年度事業では「呼び込む」研修だけでなく、「出張」して「教室の特性に合わせた」研修を「共に考え、実施する」展開を検討している

「困ったときは、おたがいさま」 外国人住民も日本人住民も・・・

皆さんも一度遊びに来てください！

社会福祉法人 さぽうと21

<http://support21.or.jp/>